

## 古代思想とベルクソンの時間論——第5～14講について

三 浦 洋（北海道情報大学）

### I 翻訳の印象

- ・とても読みやすく、ベルクソンの明晰な語り口が伝わる翻訳。また、「能動知性」と「能産知性」（p. 162）、「数える」（p. 156）、「カウントする」（p. 156）、「測る」（p. 158）のように、異なる原語に異なる訳語を当てる姿勢が貫かれている。訳語の選択に苦心の跡がうかがえる。
- ・訳注が大いに役立った。ベルクソンの論述の機微がよくわかる。

### II ベルクソンの講義の印象

- ・『時間と自由』などで展開されるように、「時間」を空間的に表象することへの批判が講義の主眼だろうと予想したが、第4講で「時間とは、その本質からして、記号的に表現されえない、純粋な諸概念によって表象のうちに収まりえない何か」であり、「それこそまさしく、古代ギリシアにおいて哲学をその初めから立ち止まらせてしまったものなのです」（p. 87）と述べる程度で、その論点はさほど前面に出ていない。むしろ、自然界を超えたイデア・神・第一天球の永遠・円運動・ヌースと魂の関係、さらに魂と時間の必然的な関係を示そうとする壮大な形而上学、もしくは神学が「時間論」の名のもとに展開されているという印象である。「プロティノスのうちには、何か絶対的に新しいもの、息吹のようなもの、えもいわれぬ熱狂めいたもの」（p. 190）があり、それは「宗教的なもの」（p. 191）だという評言は、まさにベルクソン自身の叙述にも当てはまるように思われる。
- ・大まかにベルクソンの議論の方向性を言えば、時間を概ね主観的な存在としてとらえる近代以降の時間論を批判し、客観的で実在的な時間を説明しようとしている。しかし「客観的な時間」とは言っても、科学的な意味での絶対時間とは相容れない神学的な議論が目立つ。その点、プロティノスのもとより、古代末・中世のフィロン、アウグスティヌスなど新プラトン主義系の世界観を想起させる。他方、アリストテレスを利用した叙述に限れば、主題の異なる複数の著作から片言隻句を引用しては結合するトマス・アクィナスの筆法と、驚くほど似ている。

### III ベルクソンのアリストテレス解釈

- ・アリストテレスは『自然学』第4巻の時間論で「魂がなければ、時間はないだろう」（p. 159）と書いているが、ベルクソンは「アリストテレスの思想がカント的でないことはまったくもって明らか」（p. 160）だとし、「時間としての数は、まさしく外的で、客観的な何か」（p. 157）だと述べる。アリストテレスの『形而上学』第12巻（「思惟する神」が登場）、『魂について』（「思惟する神」を想起させる能動知性が登場）、『自然学』第8巻（宇宙神学的に解釈される巻）などをつなぎ合わせれば時間の実在が読み込める、という方向で議論が進められている。
- ・ベルクソンによるアリストテレス解釈をまとめた部分は、「すべての運動を徐々に円環運動に還元し、…第一天球の運動そのものが、魂によって知覚され数えられることによって時間を与え」というもの（p. 181）。簡略に言えば、「時間とは、[天球の]円運動を測る数」（p. 168）だというのがアリストテレスの説だとベルクソンは理解している。すなわち、アリストテレスにおいては「円運動」と「カウントする魂」の「二つの項の相互作用を前提としている時間」（p. 169）になっているというのである。しかし、この解釈は、アリストテレスが説く「時

間は運動の数である」、「魂なしに時間はない」、「天球は永遠の円運動を行っている」をいわば濫用し、トマスの結びつけたものというほかない。例えば、「時間は天球の運動である」とするプラトン『ティマイオス』を確かにアリストテレスは批判しているが(p. 168)、その論点から「時間は天球の円運動<の数>である」という時間規定をアリストテレスに帰するのは、議論が飛躍していると言わざるをえない。

・さらに『形而上学』第12巻からアリストテレスの「神」（さらには『魂について』の能動知性)を持ち出し、「神—永遠—と時間のあいだにアリストテレスが確立する正確な関係」(p. 150)を見出そうとするのは、ベルクソンの独創的な思想であろう。それによれば、アリストテレスが語る時間は「天球に包括される魂」に由来するので、「時間とはまったく必然的なもの」(p. 160)であるが、「こうした解釈のために引用すべき正確なテキストはない」(p. 161)とベルクソン自身が認めている。加えて、「私はここで、アリストテレスの[思想]再構成を試みていません…」(p. 164)とも述べている。したがって、議論全体がベルクソンの独創的な時間論ととらえるべきで、「時間とは何か」を問うアリストテレスの精密な探究との結節点を探しても甲斐がないだろう。

・しかしなお、ベルクソンが「時間とは、<より先>と<より後>に関する運動の数である」という件のアリストテレスの定義をどう理解したかという点については、興味が尽きない。ベルクソンによれば、「何の数なのでしょう」(p. 156)という問いへのアリストテレスの回答は「複数の<今>」の数だが、「<今>とはどのようなものだろうか……この問いに対してアリストテレスは、明確には答えていません」(p. 157)。確かに、明確には答えていないが、以下で述べるように<今>についての考察こそアリストテレスの時間論の枢要をなしている。

#### IV アリストテレスの時間論(と場所論)をめぐる問題

##### 【『自然学』第4巻の時間論で注目される論点】

(α)定義「時間とは、<より先>と<より後>に関する運動の数である」(「より先」と「より後」はp. 156でベルクソンが言及)

(β)「魂がなければ、時間はないだろう」(p. 159)

(γ)時間は「数えられる数」であって、「用いる数」(数えるものとしての数)ではない(p. 156)

##### 【しばしば起こる誤解や問題】

(α)に関して→①「数」を持続的な「量」と混同する、②「<より先>と<より後>に関する」が「運動」だけを修飾し、「数」を修飾しないと解釈するため、序数ではなく基数ととらえる、③比喩的に「数のようなもの」と解釈し、時間が「数」であることを理解しない、などの誤解が研究者に見られる。また、④<より先>と<より後>が時間的先後を意味していると解した上で、時間を定義するのに時間的な概念を用いていると批判する論者もいる。

(β)に関して→時間は、主観が構成するものだとアリストテレスは主張しているのか？これを(α)に関連させると、数は、主観が構成するものか、それとも客観的な存在かが問題になるはずだが、この点についての論考は、ベルクソンだけでなく研究者一般に見られない。なお、アリストテレスは時間を「オン(存在)」と呼んでいる。

(γ)に関して→アリストテレスの意図に反して時間を「用いる数」のように扱い、時間の実在を説く向きもある。

##### 【『自然学』第4巻の場所論との関係】

・先行する場所論と時間論の関係を顧みるところはベルクソンの慧眼(ベルクソンの博士学位論文の副論文は「アリストテレスの場所論」)。ベルクソンは、アリストテレスが「場所と時間を同列に置き、同じ仕方で検討しています」(p. 150)と述べ、その意味での「並行性」(p. 157)を提示しつつ、魂との関わりでは「本質的な相違があります」(p. 158)と指摘する。その点は、ある意味で模範的な研究姿勢であり、場所論を顧みずに時間論を考察する研究者への警鐘にもなる。しかしアリストテレスは、運動を成立させる基盤のようなものとして場所をとらえる一方、時間は運動の数と見るため、両者を「同列に置」いてはいない。並行性があるとすれば、「～のうち

にある」「～に包まれる」の分析の仕方が場所論と時間論に共通する点であろう。また、場所には力(軽いものを上に運び、重いものを下に運ぶ力)を認め、時間には消滅的な力を認めない(運動・変化こそが消滅の原因だと説く)点に相違が見られるものの、物理的な力に訴えて場所の存在を示す方途をアリストテレスは採らない。

・ベルクソンは、場所論が書かれた理由について、「空間とは、アリストテレスにとって場所だからです」(p. 150)と述べているが、少なくとも現在の『自然学』研究では、アリストテレスが存在を否定する「空虚(ケノン)」こそ「空間」に近いと考えられている。また、プラトンが用いた「空間(コーラー)」に対する批判がアリストテレスの場所論だとも見られている(その点、p. 110の青、赤、スクリーンの3原理の例は興味深い)。

#### 【<今>こそがアリストテレス時間論の焦点】

・「時間とは運動そのものなのだろうか」(p. 155)という問いにアリストテレスは「否」と答え、「運動のパトス(様相)」、具体的には「<より先>と<より後>に関する運動の数」という結論を導く。この際、時間を<今>の運動・変化・流れとして説明しようとする矛盾を招くというのが主要な議論である。

・21世紀に入ってから、アリストテレスの研究者たちが時間論を取り上げるときに論争的となるのは、たいてい<今>の解釈である。簡略に言えば、「同じものが異なりゆく」という矛盾を抱える変化の構造が、時間論では「同じ<今>が異なりゆく」という形で先鋭的に現れるからである。

#### V ベルクソンのプロティノス解釈

・ベルクソンが時間論においてアリストテレスとプロティノスを結び付ける姿勢は徹底しており、「プロティノス哲学は、ある面においては、アリストテレス哲学の一解釈にすぎない」(p. 178)、「……時間を、神の永遠性へと結びつける」点で、アリストテレスの時間論が「プロティノスへの橋渡しの役割を果たす」(p. 164)とさえ述べている。一般に「新プラトン主義」の代表者として知られるプロティノスが、実は『エンネアデス』でアリストテレスの哲学用語を多用した人物であることは確かだけれども、とくに両者の時間論が親近性を持つとは考えにくいので、やはりベルクソン独自の視点と言うべきだろう。「プロティノスは、知性・宇宙靈魂・ヌースから時間を必然的に生じさせるために、いわば後退し、アリストテレスやプラトンよりも高いところに遡った」(p. 233)という指摘は刺激的であるが、やはりアリストテレスと比較するための典拠が示されていない。

・プロティノス自身は『エンネアデス』の第三エンネアスで「永遠と時間」と題して論じている。プラトンの『ティマイオス』が示す「時間は永遠の似姿である」という説を中心に置き、一者—ヌース(知性)—魂という発出の系列を論点に加え、「時間は魂の生である」と結論付ける。ここからベルクソンは「時間のあるところには魂があり、時間とは魂そのものだ」(p. 220)、「時間とは魂の生」(p. 225)という心理学的な時間論を展開しているが、こうした議論はアウグスティヌスやハイデッガーを想起させる。

・プロティノスに先行してアレクサンドリアのフィロン(BC20年頃～AD50年頃)が「神は時間の創造者」であると説きつつ、時間は「世界の運動」によって生じるため、「時間は、世界の後に生成した」と説明して以来、新プラトン主義の潮流に属する思想家たちは、神の創造との関連で、一様に時間に対する関心を示している。ベルクソンの時間論がこうした系譜に位置づけられることは、疑いえないと思われる。

【付記：理解し難かった語句】・「真の量」(p.166)→何を指すのか？